

作成番号:0329

一般社団法人 日本侵襲医療安全推進啓発協議会 「会員向けメールマガジン」

号数:2025-329

内容:犬を飼っている家庭の乳児は幼少期にアトピー発症リスクが低い

出典:Gene-Environment Interaction Affects Risk of Atopic Eczema: Population and In Vitro Studies.

Allergy. 2025 Jun 04; doi: 10.1111/all.16605.

<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/40462597/>

アトピー性皮膚炎(AD)は、皮膚のバリア機能が低下することで刺激物やアレルゲンが侵入しやすくなり免疫反応が引き起こされ、湿疹、かゆみ、炎症などの症状が生じる疾患で、遺伝的要因と環境要因が関与する。犬を飼っている家庭の乳児は、ADを発症するリスクが下がるか、英エディンバラ大学の研究者らによる研究結果は、「Allergy」に6月4日掲載された。

今回、ヨーロッパで実施された16件の研究データを分析し、ADに関連する既知の24種類の遺伝的バリアントと、母親の妊娠中および児の生後1年間における18種類の環境要因の相互作用を調べた。その結果、犬の飼育を含む7つの環境要因と少なくとも1つのAD関連遺伝的バリアントとの間に14の相互関係が示唆された。また、254,532人を対象とした追加解析から、犬への曝露と第5染色体に位置する遺伝的バリアント「rs10214237」との間に統計学的に有意な相互作用が認められた(相互作用のオッズ比0.91、95%信頼区間0.83~0.99、P=0.025)。rs10214237は、免疫応答の調節に関与するインターロイキン(IL)-7受容体をコードする遺伝子の近傍に位置する。更に、犬への曝露はこの遺伝的バリアントの影響を変化させて皮膚の炎症を抑え、AD発症リスクを抑制している可能性が示唆された。

乳児期に犬に曝露することで、ADの発症に関与する遺伝子の影響が軽減される可能性が示された。

